**説教20231210イザヤ11:1-10マタイ3:1-12「自分が実を結ぶために」**

**「悔い改めよ。天の国は近づいた」この声を聞くとき、私たちはクリスマスが近づいたということを感じます。クリスマスとは、神の御子イエスキリストがこの地上にお生まれになったことをお祝いする日です。御子イエスは、力なく弱い赤ちゃんの姿でこの地上に降られました。その場所は、マリアとヨセフと言う貧しく寄る辺ない夫婦が宿を借りていた馬小屋の中でした。**

**私たちはこの貧困の中でお生まれになったイエスキリスト、今でいえば、貧困家庭に生まれたイエスキリストの誕生日を、今この地上の至る処でみんなでお祝いしています。それは、何故でしょうか。それは彼の中に、聖なる霊、聖霊が宿っているからです。この聖霊は、イエスキリストから発せられ、今を生きる私たち一人ひとりのうちにも宿って下さいます。この聖霊に照らされて、羊飼いたちもイエスキリストが誕生された馬小屋に駆けつけてお祝いをすることが出来たのでした。**

**聖霊とは、知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊であり、この霊がみんなの中に宿る時、そこに天の国が形作られます。**

**そう言う訳で、私たちは御子イエスのお誕生をお祝いする時、図らずも、永遠の祝福の国である天の国へと入れられるのです。**

**天の国は天国とも言いますし、誰もが、少なからず、その国に入りたいと恋焦がれる場所なのではないでしょうか。あなたは天国に入れられたいですかと問われて、私は天国には入りたくありません、と言う人はあまりおられないのではないでしょうか。**

**今、多くの人が漠然とした形であるにせよ、こうして天国にあこがれの念を持っているのです。**

**教会とは、その天の国へ入れられるための備えや、心の持ち方や行いを具体的に整えるために建てられています。こういうと何か堅苦しい印象ですが、実は、教会は、人間一人ひとりが持っている罪が、御子イエスによって赦されて、身も心も自由にされる場所であります。そして教会の中心にはいつも御子イエスがおられます。そして教会は聖霊で満たされます。**

**御子イエスは、私たち一人ひとりが、具体的に、天の国へと入れられるために来て下さいました。そして、御子イエスは、天の国への門であり、道であり、そして天の国そのものでもあります。**

**つまり私たちは、この地上で道行く時も御子イエスに守られ導かれ、どの門に入るか選ぶときも、御子イエスに手を引かれてその門に入るのが幸いであります。**

**私たちはこの様にいつもいつも自分を守って祝福して導いて下さる御子イエスのほうに向き直って、眼差しを向けて、彼に感謝をして彼をほめたたえるのが幸いであります。**

**天の国が完成を見るのは、終末の時であります。終末の時と言うのは、自分が今地上で生きている命の長さを超えた時であります。終末の時がいつやって来るかは、神さましか知りませんが、私たちはいつもいつも御子イエスを信じて御子イエスと共に歩んでいるならば、確実にその終末の時を、天の国で迎えることが出来るでしょう。**

**さてこの様に、この私も２０００年前のヨハネの様に「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って御子イエスのご誕生の良き知らせを述べ伝えているのであります。**

**の地上の世界に目を向けますと、そこには戦争があり、争いがあり、人と人とが憎しみあう姿が普通にみられる、恐れと不安の時代に入ったように感じられます。私たちは一体何のために生きているのか、生かされているのかと言った根源的な問いかけを、誰しもがそれぞれ真剣に、日々問いかけておられることでしょう。**

**今日の地上の世界には、偶像崇拝がはびこっています。その偶像崇拝の一例として、ギリシャ神話に出て来ますイカロスのお話を少しします。イカロスは父親ダイダロスと共に、鳥の羽をロウで固めて作った大きな翼を装着して、大空へと飛び立ちました。しかし、イカロスは父親の警告を無視して、上昇して太陽へと近づきたいという衝動に駆られて、高く高く羽ばたきました。そして、ロウは溶け出し遂に羽はバラバラに散らばって、イカロスの体は海の上に墜落して、彼の命は失われたのでした。**

**イカロスは、この時太陽を偶像として崇拝し、太陽の魅力にとりつかれたのでした。そしてイカロスがその時感じた高揚感や、あこがれ、崇拝するものを得ようとして一途に行動して、それに近づいていくといったことは、現代人にとって決して身に覚えのないことではないでしょう。現代人の偶像崇拝の対象は、いわゆるアイドルや、偉い人や、偉い立場、金銭、そして自分自身などが考えられるでしょう。しかしそれらの偶像崇拝は、長く続くものではありません。それらの偶像崇拝は、いつか目覚めさせられるはかない夢にしかすぎません。そして、自分が崇拝していたものが偶像だと気づいたときには、墜落していて自分の命が失われているといったことも起こりかねないのが偶像崇拝の危険な処であります。**

**2000年前に「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言い広めたヨハネは、その偶像崇拝の危険性を十分に知っていたので、人々に大変厳しい言葉で、まことの神の御子イエスのことを告げ知らせたのでした。**

**ヨハネが言っている「悔い改めよ」というのはどういうことでしょうか。それは御子イエスのほうに向き直って、眼差しを向けて、聖霊の光に照らされて、自分の罪が赦され、新しい命が与えられるということです。そして御子イエスに感謝をして彼をほめたたえるように導かれるということであります。**

**その様に導かれた人は、御子イエスから洗礼を受けることになりますが、ヨハネは洗礼には水の洗礼と火の洗礼があると言っています。今ではこれらの洗礼は一つでありますが、御子イエスが地上に来られるまでは、水の洗礼だけで火の洗礼はなかったということをヨハネは言っています。**

**御子イエスが来られるまで、ヨハネは水だけで洗礼を授けていました。この水による洗礼と言うのは、私たち人間の生まれながらの肌感覚で理解しやすいことではないでしょうか。私たちは礼拝する場所に行く前に、必ず行水をしたり、手を洗ったりして、体を清めるということを自然とする者であります。しかし、ヨハネはその水の洗礼だけでは、人々が悔い改めるのには不十分であることを承知して、洗礼を受けに来た罪深い人々に対して次の様に言いました。**

**「の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。**

**悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。**

**ヨハネはこの様に言って、ファリサイ派やサドカイ派の人々など、当時の社会で威張っていた人たちを、言葉で打ちのめしたのでした。彼は、ファリサイ派やサドカイ派の人々などがよくしていた、自分の先祖の偉人であるアブラハムという人物を崇拝するという偶像崇拝を、率直に戒めたのでした。**

**ヨハネの言葉は辛辣です。**

**は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。**

**ここに火による洗礼が語られていますが、その火による洗礼を授けるということはヨハネ自身の手には負えないことであると、ヨハネは言っています。**

**わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。**

**その御方と言うのは言うまでもなく御子イエスのことであります。**

**今の教会におきましても、洗礼志願者に洗礼を授けるのは、御子イエス御自身であります。確かに、洗礼志願者を水に浸すのは、目に見える牧師でありますが、その背後には御子イエスがおられて、御子イエスの御心によって洗礼は授けられるのです。**

**火による洗礼と言うのは、水による洗礼に比べて激しいものです。**

**「そして、手にを持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」**

**この様にして、私たちは自分の中にある罪の一つひとつが御子イエスによって焼き払われ、打ち砕かれて、罪なき者として清められるのです。私たちが、本当に今迄の罪を赦される為には、この様な罪の消滅を伴う、火の洗礼が必要です。そして、この洗礼を授けるのにふさわしいのは、生まれながらに罪を持たないたった一人の人間である、御子イエス以外には居ないのです。**

**そして、御子イエスの愛というのは、罪の赦しに留まりません。御子イエスがこの私を愛して下さる愛と言うのは、私がこの地上を去った後も変わることなく、私に与えられます。私たちを最後まで愛されるために、御子イエスは、十字架の死の後に、私たち一人ひとりの為に復活をされたのでした。**

**御子イエスこそ本当の神様であるということは、ここにはっきりとすることでしょう。御子イエスは、どんな仕方であれ、御自分に近づいて来て、助けを求めてすがりつく者たち全員を、罪から赦して、救いへと導こうとされています。そして終末の時に、その人を確実に天の国へと入れて下さるのです。**

**この地上を照らす太陽も、人間と同様に、御子イエスによってつくられたものであります。その被造物である太陽を誤って偶像崇拝したところで、私たちは、救いを得られもしないし、実を結ぶこともないのです。**

**私たちの生涯は、この地上で完結するものでは決してありません。私たちの生涯は、この地上を去った後も御子イエスに守られ続けて、終末に訪れる天の国へと至ることが出来るのです。私たちは、この自分が御子イエスによって最後に実を結ぶために、悔い改めて、御子イエスのほうに向き直って、この地上生涯を、いつもいつも御子イエスの御守りと祝福のうちに歩み通して参りたいと願います。**

**祈り**

**父なる神様、一人のみどり子が聖霊によってお生まれになり、私たちと共に生き、私たちを最後まで祝福して導いて下さる救い主として現れて下さいました。**

**その大いなる恵みに感謝し、あなたに讃美の歌をお捧げします。**

**どうか、私たち一人ひとりの心をあなたに向けさせ、まことの命の光を受け取ることが出来るようにして下さい。**

**どうか、私たちを、いつも悔い改めさせ、あなたに立ち帰らせて下さい。愛の人として隣人たちを愛する業を行わせて下さい。**